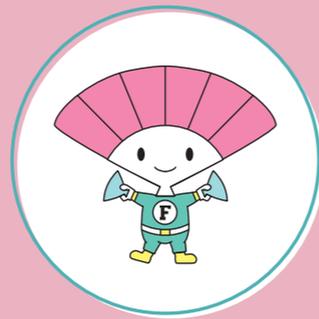


881 歌え!パパイヤ



ベトナムの怪しい彼女



ASIAcenter
JAPAN FOUNDATION

国際交流基金アジアセンターpresents

FUN! FUN! ASIAN CINEMA

ときめく東南アジアのヒロイン映画

ムクシン



特別篇

ブルカの中の口紅



三人姉妹(1956年版 & 2016年版)



主催：国際交流基金アジアセンター

ワクワク×ドキドキ!東南アジア映画上映!

国際交流基金アジアセンター presents 「FUN! FUN! ASIAN CINEMA」は、ジャンルや時代を超えて愛される東南アジア地域の映画を定期的に紹介。「ときめく東南アジアのヒロイン映画」と題して、様々な文化的・社会的背景の中で自分らしく輝くヒロインたちにスポットを当てます。



- 1 ハートランド:「シンガポール人」の物語が紡がれる場所 | 滝口 健
- 2 『ベトナムの怪しい彼女』を取り巻くベトナム映画の上映状況 | 秋葉 亜子
- 3 ヤスミン・アフマド監督とマレーシア映画 | 戸加里 康子
- 4 “フェミニズム・ウェーブ”の最先端的作品『ブルカの中の口紅』 | 松岡 環
- 5 ニア・ディナタの挑戦と三つの『三人姉妹』 | 西 芳実

本冊子は、「FUN! FUN! ASIAN CINEMA ~ときめく東南アジアのヒロイン映画」特集に合わせて制作されました。禁無断転載。



ハートランド:

「シンガポール人」の物語が

紡がれる場所

881 歌え!パパイヤ
881

監督:ロイストン・タン

2007年 | シンガポール | 109分 | 中国語・日本語 | DVD ©Zhao Wei Films

屋台の外のテーブルに山のようにビール瓶を並べ、舟をこいでいる老人。ご近所との果てしないおしゃべりに興じる主婦。のんびりした、平日の昼下がり——

シンガポールと言えば、どんなイメージがあるだろうか。近代的なビルが立ち並び、一流ブランドが軒を連ね、世界の経済を動かすビジネスピープルが闊歩する。そのような都市国家を想起する人も多いかもしれない。しかし、都心から車で10分も走れば、冒頭の一文中で示したような、それとはまったく異なるシンガポールが姿を見せる。

延々と連なる団地群と、その低層部分を埋める店舗や食堂。これがシンガポール郊外の典型的な風景だ。シンガポールに住み始めた頃、路線バスを乗り継いで全国(といっても東京23区と同じくらいの広さしかないのだが)を回ったことがある。どの場所で撮った写真も団地ばかりで、ほとんど見分けがつかないことに驚いたのを覚えている。

シンガポールは国民の8割以上が住宅開発庁(HDB)の提供する公共集合住宅に暮らす「団地国家」だ。しかも、民族ごとに固まって住むことで民族間の対立感情が高まることを防ぐために、国全体の民族構成に準じる形で地域ごと、さらには建物ごとの民族構成比が厳密に定められているため、HDBの集合住宅はまさに「小さなシンガポール」の様相を呈している。『881 歌え!パパイヤ』の舞台となっているこうした郊外の住宅地が「ハートランド」、中心地と呼ばれるのには、そのような背景があるのだろう。

しかし、実際には「ハートランド」という言葉には、シンガポールではむしろネガティブなイメージが付き

まとう。都心に勤め、流ちょうな英語を駆使しながら世界とつながって活動する人々は「コスモポリタン」と呼ばれ、新世代のシンガポールをけん引するクリエイティブな労働力とみなされている。一方、HDBに住み、基本的にその地域の中で生活を送るハートランドの人々=「ハートランダー」は非エリート層とされ、なまりの強いシングリッシュと呼ばれる英語や自民族の母語を使う者も多い。中華系住民の間では福建語や広東語などの方言も広く使われている。知識集約型経済に転換し、高付加価値産業に集中することで生き残りを図ろうとしているシンガポール政府にとっては、ハートランダーはある意味でお荷物なのである。

そのため、政府はさまざまな手段でハートランダーをコスモポリタンに転換することを目指している。シングリッシュや中国語方言の公の場での使用制限もその一つである。映画やテレビでこれらの言語を使用することにも規制があり、福建語を広範に使用した『881 歌え!パパイヤ』にも圧力が加えられた。

しかし、近年ではHDBがシンガポール人の心のよりどころとして機能しているという議論がおこなわれるようになり、単純なコスモポリタンとハートランダーの二分法によるのではなく、ハートランドにおける複雑な状況を見つめようとするアーティストも増えている。シンガポール人の物語が紡がれる場所として、ハートランドを舞台とした映画はこれからも作られ続けていくことだろう。『881 歌え!パパイヤ』は、そのような流れの先駆けとして記憶される作品となるのではないだろうか。

滝口 健 | Takiguchi Ken

ドラマトゥルク、翻訳者。1999年から2016年までマレーシア、シンガポールに拠点を置き、シンガポール国立大学よりPhD取得。数多くの国際共同制作演劇作品に参加。アジア・ドラマトゥルク・ネットワーク創設メンバー。東京藝術大学非常勤講師。



ベトナム

『ベトナムの怪しい彼女』を 取り巻くベトナム映画の 上映状況

ベトナムの怪しい彼女
SWEET 20

監督：ファン・ザー・ニャット・リン 2015年 | ベトナム | 127分 | ベトナム語 | Blu-ray
©2015 CJ E&M CORPORATION, ALL RIGHTS RESERVED

原題“EM LÀ BÀ NỘI CỦA ANH”の直訳は『君は僕のお婆ちゃん』。人称代名詞が年齢や相手との関係性できっちりと区別されるベトナム語においては決してありえない“ふざけた”タイトルの本作は2015年12月11日に公開されると順調に興行成績を伸ばし、『ワイルドスピードSKY MISSION』、『アベンジャーズ/エイジ・オブ・ウルトロン』などに続きその年のトップ5入り。年が明けても『スターウォーズ/フォースの覚醒』の興行収入1位スタートを阻止、最終的には150万人近くを動員してベトナム映画歴代興行記録No.1(1,020億ドン:約5億円*)を打ち立てた。

ベトナムで人気なのはハリウッド映画、そして韓流だ。韓国はテレビドラマや歌、映画などコンテンツのみならずベトナムに映画館を建てて自社作品を上映するなど総合的な戦略で成功している。一方でベトナム映画はドイモイ(1986年の刷新政策)後、多くの傑作が出たものの失速して2001年の制作本数は4本。しかし2003年に初の民間映画会社が設立され、あわせて都市部を中心にシネコン建設が展開、2015年には37本の長編実写映画が制作されるまでに成長した。アクションやホラー、時代劇が目立つ中で人気を博した本作は韓国映画『怪しい彼女』の奇想天外な設定をベトナムに変え、笑いあり涙あり、さらに歌に振り付けとテンコ盛りの“家族もの”。2015年は『草原に黄色い

花を見つける』(2017年8月日本公開)も800億ドン(約4億円*)のヒットとなっており、脚本のしっかりした家族ものがベトナムの観客に受け入れられたことに注目したい。

ヒロインを演じるミウ・レはドラマ出演や歌手、海外アニメ映画の吹き替えなどを経て、今回主演スクリーンデビュー。ヴィンテージ・ファッションに身を包み、小鹿のような目で可憐に“20歳に戻ったおばあちゃん”を演じ、根底に流れる母の愛を表現した。またベトナムの国民的音楽家チン・コンソンの懐メロや子守唄をはじめオリジナルのポップなナンバーからバラードまで、心を揺さぶる歌声を披露し存在を印象付けている。

*2017年11月現在



秋葉 亜子 | Akiba Ako

ベトナム語通訳・映画字幕翻訳 東京外国語大学、福岡大学非常勤講師。ベトナム関連書籍などの執筆、ベトナム概要講演を行う。著書に「文法からマスター! はじめてのベトナム語」(ナツメ社)、共著に「現代ベトナムを知るための60章」(明石書店)

マレーシア



ヤスミン・アフマド監督と マレーシア映画

ムクシン
MUKHSIN

監督：ヤスミン・アフマド 2006年 | マレーシア | 94分 | マレー語 | 35mm

『ムクシン』は、2004年に『細い目』で、マレーシア映画界に燦然と現れ、2009年に急逝するまでに5本(『細い目』の前年に、元々TV用の作品として作られた『ラブン』を含めると6本)の作品を残した、ヤスミン・アフマド監督の長編第3作(同4作)である。『ムクシン』までのヤスミン監督の作品には、すべてオーキッドという名前のマレー系の少女が登場する。『細い目』では華人系の青年ジェイソンと17歳のオーキッドが恋に落ち、続編の『グブラ』では、マレー系の夫に不貞を働かれたオーキッドが、ジェイソンの兄と心を通わせる。そして『ムクシン』では、10歳のオーキッドと、ムクシンという名の少年との淡い初恋が描かれている。ヤスミン監督の作品は、小都市を舞台に、異民族間の交流や恋愛を描いたものが多いが、『ムクシン』は農村を舞台に、主にマレー系の人々の人間模様を描いている。

男勝りでサッカーが好きなオーキッド、イギリスに留学したことがあり家でも英語を話す母親、家族の誰よりも威張っているお手伝いさんなど、オーキッドの家庭は、前作、前々作と同様に一風変わっていて、近所の主婦からは「マレー系の風上にも置けない」と言われている。しかしオーキッドの家庭は常に愛情と笑いに包まれ、隣人の意地悪はひがみのようにしか聞こえない。他の作品にもしばしば見られる、マレー系の人々に向ける優しくも厳しい監督のまなざしがここにも現れている。

『細い目』と『グブラ』では、いまやマレーシアを代表

する女優の一人になったシャリファ・アマニがオーキッドを演じたが、『ムクシン』ではアマニの妹シャリファ・アルヤナが少女時代のオーキッドを演じている。オーキッドの母親役はアマニの姉のシャリファ・アレヤ、そしてアマニ自身もちょっと不思議な役で登場する。

『ムクシン』は、2006年、第19回東京国際映画祭(TIFF)で、マレーシアでの公開に先駆けて世界初上映された。この年のTIFFでは、マレーシアのインディペンデント映画の特集上映(アジアの風「マレーシア映画新潮」)が行われ、前年に『細い目』がTIFFの最優秀アジア映画賞を受賞したヤスミン監督の作品も4作品が上映された。当時、マレーシアのインディペンデント映画は「マレーシアン・ニューウェーブ」と呼ばれ、世界の映画祭で注目されるようになっていた。しかしこれらの作品は、マレー語以外の言語で作られていることも多く、マレーシア国内では「マレーシア映画」としては扱われず、「インターナショナル」枠でやっと上映が行われるような状況だった。そうした中、インディペンデント映画の作り手たちは互いに協力し合い、多くの作品を生み出していた。2009年にヤスミン監督が急逝した後は、こうした共同作業は少なくなったと言われているが、それぞれが独自の活動を続けており、新しい世代の監督も生まれている。また国内での「マレーシア映画」の定義が変わり、マレー語を主な使用言語にしない作品も「マレーシア映画」として国内で上映されるようになっていく。

戸加里 康子 | Togari Yasuko

マレーシア語通訳・翻訳・講師。いくつかの大学でマレーシア語を教えるかたわら、マレーシア映画の字幕監修なども手がける。著書に「旅の指さし会話帳 マレーシア」(情報センター出版局)など。



インド

“フェミニズム・ウェーブ”の 最先端的作品

『ブルカの中の口紅』

ブルカの中の口紅
Lipstick Under My Burkha

監督：アランクリター・シュリーワースタウ 2016年 | インド | 117分 | ヒンディー語 | DCP



インドネシア

ニア・ディナタの挑戦と

三つの『三人姉妹』

三人姉妹(1956年版 & 2016年版)
Three Maidens (Tiga Dara) / Three Sassy Sisters

三人姉妹 (1956年・デジタル修復版)

監督：ウスマル・イスマイル 1956年 | インドネシア | 115分 | インドネシア語 | デジタル

三人姉妹 (2016年版) 監督：ニア・ディナタ

2016年 | インドネシア | 124分 | インドネシア語 | DCP ©KalyanaShiraFilms/SAFilms

インドでは昔から、数は少ないながら女性監督による意欲的な作品が作られてきている。インドは圧倒的な男性優位社会ではあるが、教育を受けた女性たちは自立心旺盛で社会への鋭い眼差しを備えており、そんな中から女性監督も次々と生まれてきた。特に経済発展が本格化した2000年以降は、様々な企業が映画に出資するようになって、製作資金面でのハードルも下がったため、女性が監督に進出できるチャンスも広がったのである。

女性監督が取り上げるテーマは様々だが、女性の自己確立を描く作品で秀作が目立つ。日本で劇場公開や映画祭上映された作品では、『マダム・イン・ニューヨーク』(2012)、『ニュー・クラスメイト』(2015)等があるが、東京国際映画祭で国際交流基金アジアセンター特別賞を受賞し、あいち国際女性映画祭でも上映された本作も、その1本と言えるだろう。

本作は北インド中央部の地方都市ボーパール(1984年に化学工場の有毒ガス流出事故で多数の犠牲者が出た)を舞台に、下町の古い集合住宅に暮らす4人の女性—イスラム教徒のレハナとシリン、ヒンドゥー教徒のリーラとウシャが登場する。

父母がブルカ店を営む大学生レハナは、セレブ女子学生に対抗し、口紅やドレスの万引きを重ねる。3人の子持ちのシリンは、優秀な訪問セール

スウマンだが、常に自分の意を押しつける夫に悩む。自宅で美容サロンを営むリーラは、婚約者がいるのに起業パートナーのカメラマンと奔放な肉体関係を続ける。そして、住宅の家主の一族である“おばさん”ことウシャは、55歳ながらセクシーな小説を愛読し、水泳コーチ相手に妄想を募らせていく。4人が様々な制約の中でもがく姿が赤裸々に描かれ、衝撃的だ。

かなり激しいセックス描写もあったため、インドでは公開が危ぶまれたが、約20箇所カットの後に検定を通過。2017年7月21日に400スクリーンで公開されると、製作費の4.5倍近い約4億5千万円を稼ぎ出すスマッシュヒットとなった。映画評も★4.5～3.5(★5満点中)という高評価が並び、観客の反応も「大胆だけど正直な映画」「皆が観るべき作品」と好意的だった。

日本で公開された『パーフェクト王の凱旋』(2017)や公開予定の『ダンガル(原題/レスリング)』(2016)からもわかるように、最近は男性監督作品にもフェミニズムの視点がしっかりと埋め込まれている。先鋭的な本作のヒットは、“フェミニズム・ウェーブ”の中でインド人観客の意識が変化している証明とも言えそうだ。

ニア・ディナタ監督は常に挑戦し続ける。最初の長編『Ca Bau Kan(茶房館)』(2002)では華人、続く『アリサン!』(2003)ではLGBT、『分かち合う愛』(2006)では一夫多妻婚というように、センシティブな問題を正面から取り上げて世に問うてきた。そんなニアが「インドネシア映画の父」と呼ばれるウスマル・イスマイル監督の古典的名作『三人姉妹』(1956)をリメイクしたのが『三人姉妹(2016年版)』である。そこにはどんな挑戦があるのか。

ウスマルの『三人姉妹』はハリウッド映画をもとに作られたことが知られている。ヘンリー・コスター監督の『天使の花園』(1936)と、その続編にあたる『庭の千草』(1939)である。ニューヨークで父母と共に暮らす3人の姉妹の物語で、次女が長女の婚約者を好きになったことからてんやわんやになり、それを三女が父と協力して解決する。長女の結婚式のシーンであっと驚くどんでんがえしでハッピーエンドとなる。

ウスマルはジャカルタを舞台にして翻案し、長女の婿探しに奔走する祖母のキャラクターを加えてミュージカル仕立ての娯楽作品に仕上げた。ハリウッド映画全盛だった当時のインドネシアで国産映画としては記録的なヒット作となり、国産映画の地位を高めるのに貢献した。その後もテレビで繰り返し放映され、世代を越えて知られる古典的名作の一つとなった。

ニア版では、主題歌「三人姉妹」をはじめ多くのシーンでウスマル版の要素をふんだんに盛り込みつつ、舞台を東インドネシアのフローレス島のリゾートホテルにすることで、3人の姉妹がより大胆により率直に女性としての心情を吐露し、積極的に行動している。特に三女のベベが見せる伸びやかな肢体や開放的な恋愛観は、2010年代以降にイスラム恋愛映画が流行し、服装や行動にイスラム的価値をまとった女性の姿を見慣れた目にはまぶしく映る。この作品がインドネシアで劇場公開されたときには「女性が積極すぎる」との理由で21歳以上限定とされた。

特筆すべきこととして、ニア版では父親の役割が大きく後退している。伝統的な母系社会として知られているフローレス島を舞台にしていることもそうだが、ニア版に新たに加えられた11の楽曲のうち、祖母オマと3人の姉妹が唱和する「マトリアーク」(Matriarch、女家長)は象徴的である。ヘンリー・コスター版でもウスマル版でも、父は娘の願いを成就させることに協力する。ニア版では、父はほとんど存在感がないばかりでなく、娘の願いにとって障害となっている。



西 芳実 | Nishi Yoshimi

京都大学東南アジア地域研究研究所准教授。専門はインドネシア地域研究。著書に『災害復興で内戦を乗り越える』(京都大学学術出版会)などがある。混成アジア映画研究会メンバー。

松岡 環 | Matsuoka Tamaki

アジア映画研究者。麗澤大学、国士館大学非常勤講師。『きっと、うまくいく』『PK』等、インド映画の字幕翻訳も担当。著書に『アジア・映画の都』(めこん)、『レスリー・チャンの香港』(平凡社)、共著に『インド映画完全ガイド』(世界文化社)など。